

南台人文社會學報

第二期 2009年11月 頁63-89

『夜窗鬼談』と『聊齋誌異』にみる幽霊と冥界

陳 炳崑

要 旨

日本明治期の漢文小説『夜窗鬼談』は漢学者石川鴻齋の作品で、その内容は怪奇話を中心としており、この小説を通して石川は勸善懲悪の考えを人々に広めようとした。この作品では中国清朝時代の『聊齋誌異』から題材などをとっている。本稿では、『夜窗鬼談』の幽霊や冥界に関する物語の世界を論じる他に、創作方法、作品の受容、文学思想等の点で『聊齋誌異』の幽霊や冥界に関する作品と比較し、その作業を通じて日本の漢文小説における中国古典小説『聊齋誌異』の影響の状況や両者の創作の特質を明らかにすることである。

キーワード：『夜窗鬼談』、『聊齋誌異』、幽霊、冥界、勸善懲悪

陳 炳崑、世新大学日本語学科副教授

電子メール：chenbk@cc.shu.edu.tw

南台人文社會學報

第二期 2009年11月 頁63-89

《夜窗鬼談》與《聊齋誌異》中的鬼冥世界

陳 炳崑

摘要

日本明治時期的漢文小說《夜窗鬼談》是漢學者石川鴻齋的作品，此本小說內容是以談鬼說怪為主，他編撰這本小說的用意在於勸懲戒世，教化人心。作者在書中亦模仿了中國清朝《聊齋誌異》的作品。本論文除探討石川《夜窗鬼談》的鬼冥故事外，亦與《聊齋誌異》一些鬼冥作品在題材與創作方法、作品的受客、文學思想方面作一比較，藉以了解此部日本漢文小說受中國古典小說《聊齋誌異》影響的情形及其寫作的特色。

關鍵詞：夜窗鬼談、聊齋誌異、鬼、冥世界、勸善懲惡

陳 炳崑、世新大學日本語文學系副教授

電子メール： chenbk@cc.shu.edu.tw

1. はじめに

『夜窗鬼談』は日本の明治期に出版された漢学者石川鴻齋の漢文小説である。この小説は上下二冊であり、上は『夜窗鬼談』として1889年、下は『東齊諧』として1894年、ともに東陽堂より刊行された。この二冊は姉妹編であり、下を出すときに書名を変え、『夜窗鬼談』と総称した¹。その中身は、怪異譚が中心で、『聊齋誌異』等の類似した中国小説と日本の怪異話から題材をとっており、結果、独特の作風と思想を生み出している。一篇一篇の語りは比較的淡々としたものであるが、機知にとみ、時に浪漫的な点もあり、その展開も巧みで一読の価値がある。『夜窗鬼談』と『聊齋誌異』の関係については、藤田佑賢、王三慶、黒島千代、黄錦珠等がすでに論じている。黒島は主に両作品の背景や手法、題材探し、『聊齋誌異』の『夜窗鬼談』への影響を論じている。黄錦珠の論文では、『夜窗鬼談』の描写の特色、創作の基となるものや、『聊齋誌異』との関係の他に、『閱微草堂筆記』や『子不語』と『夜窗鬼談』の関わりについても論じている²。

¹ この経緯については、王三慶「日本漢文小説研究初稿」（中國古典文學學會主編『域外漢文小説論究』、台北、台灣學生書局、1989）、並びに黄錦珠「日本漢文小説『夜窗鬼談』的寫作特色及其淵源」（中正大學中文系主編『中國域外漢文小説國際學術研討會論文集』、台北、學生書局、2001）に詳細に論じられている。

² 王三慶の論文では日本の様々な漢文小説について紹介がなされているが、『夜窗鬼談』の紹介は多くはない。また藤田佑賢の「聊齋誌異の一側面—特に日本文学との関連において—」（『慶應義塾創立百年記念論文集、文學』、1958）では、『夜窗鬼談』の幾つかの作品と『聊齋誌異』の関連と、作者石川の生涯について論じられている。最近では、林淑丹が2009年9月に「台大日本語文創新國際學術研討會」で「石川鴻齋《夜窗鬼談》と小泉八雲の怪談—〈お貞の話〉〈鏡と鐘と〉を例として」の

本稿ではこれらの先行研究の成果を踏まえ、これらとは異なる、幽霊や冥界の故事、形象について詳細に分類し、両作品に描かれる幽霊や冥界に関する両作品における差異や特徴を探ることを通して、日本の漢文小説への中国小説の影響並びに両者の特色を明らかにするものである。

2. 『夜窗鬼談』にみる幽霊と冥界

日本の怪異を扱った作品に、古くは『日本霊異記』、『今昔物語』、『平家物語』、『太平記』、さらに江戸時代の『伽婢子』（中国の『剪燈新話』の影響を強く受けている）、『雨月物語』、民間故事の『四谷怪談（後に歌舞伎の題材にもなった）』等があり、いずれも幽霊の話がある。だが、本稿では『夜窗鬼談』に焦点を絞り論じ、これらの作品については取り上げないものとする。『夜窗鬼談』には狐や狸、妖怪の他、幽霊と冥界を扱った作品群がある。筆者の整理によれば、それらの作品は以下のとおりである。①哭鬼、②笑鬼、③瞰鬼、④奇縁、⑤鬼兒、⑥客舎見鬼、⑦冥府、⑧怨魂借體、⑨牡丹燈、⑩鬼神論上・下、⑪縊鬼、⑫累女、⑬飛鼎、⑭靈魂再来、⑮千葉某、⑯飛鶻菴、⑰阿菊、⑱阿岩で、この中で幽霊について扱ったものが16篇、冥界を扱ったものが2篇である³。

これらの話は登場人物（幽霊）像や内容から以下のように分類することができる。①因果報應型、②人間と幽霊の恋愛型、③表明教化型（作者の思想や感慨を表明するものも含む）、④その他（奇癖、怨念を持つ幽霊、悪鬼等）である。

発表を行っている。ただ、筆者と研究テーマが異なり、本稿では参照していない。

³本稿における『夜窗鬼談』の原文は、『日本漢文小説叢刊』第一輯第二冊、筆記叢談類二（王三慶等主編、台湾学生書局出版、2003年10月）を参考にした。

(1) 因果応報型

因果応報は『夜窗鬼談』の幽霊や冥界の物語において重要な部分を占める。

「鬼兒」は齢 50 歳過ぎの借金を抱えた甚兵の話である。借金の返済のために娘を吉原に売って 50 両の金を得るが、その夜、行きつけの酒屋に寄り、財布を無くしてしまう。酒屋の妻は甚兵の財布を見つけもの拾っていないことにして隠してしまう。甚兵は嘆き悲しみ、ついには入水自殺する。その後この酒屋夫婦は豊かになるが、子どもを授かることなく、神仏に祈っていたところ、40 歳を過ぎて漸く子どもを授かる。だが、その子は甚兵にそっくりで、一週間で歩くことができるようになった。ある日、妻が縫い物をしていると、子どもはその破れた服から甚兵の財布を見つけ出し、ここに 50 両あると、母親に告げた。母は驚き、夫にその話をした。夫は子どもを怒りつけたが、子どもは逆に大声で叫び、夜叉のような顔になり、母親の胸に噛みついた。父は使用人を呼んで秤で打ちつけさせ、終にはその子は死んでしまった。密かに埋葬したが、その後、酒屋の妻は狂死し、泥棒にも入られ、家は他人の手に渡ってしまった。

元来、酒屋の主人と客であった甚兵は良く知る仲であり、甚兵を騙してお金を得るべきではなく、騙したお金は不義の財である。石川は、この話の最後に「不義のお金はすぐになくなる」と警句を書いており、この話は林屋某から聞いたと記している。「悪いことをすれば悪い報いがある」という他にこの話には、不義を働いてお金を得るようなどん欲さを持たないよう、人々に教諭す意味を持っている⁴。

「客舎見鬼」は石川と友人である渡辺が東海道の吉原の宿で一緒に泊まった時に出会った幽霊の話である。渡辺が深夜になっても寝付け

⁴本稿『夜窗鬼談』の日本語の訳文は、小倉齊、高柴慎治譯註『夜窗鬼談』（春風社出版、2003 年 12 月）を参照した。

ないでいると、一人の若い女性が蚊帳の外から中を窺っている。泥棒と思った渡辺は石川を起こしたが、石川は遊女が客を引きに来たという。翌日、店の女に遊女のことを聞いてみると笑って何も答えなかった。二人は宿から四里ほど離れた茶屋で、店の老婆から次のような話を聞いた。昔、泊まった宿にはひとり遊女がいたが、梅毒を患いお客をとることができなくなった。店の主人はその遊女を幾度となく責め立て、ついに遊女は舌をかんで自殺した。その後恨んで幽霊になり、夜な夜な主人のところに出るようになった。一年後、作者がその店の前を通ってみると、すでに潰れていた。この話は遊女が祟って幽霊になり主人に報復を果たした話である。

「冥府」は、あの世の話である。田直生の父親は病死するが、家の財産はなく、貧しかった。ただ、近くの村に雑穀を売って暮らすしかなかった。よく知っている人の紹介で賭博をするようになるが、取り締まりに会い、乱闘の末、田直生は殴られて気を失ってしまう。そして、冥府まで連れられていくが、そこで偶然亡き父に出会い、亡父に救いを求める。冥府の閻王（閻魔大王）は田直生の学校時代の師であり、田直生の生前の孝行を思い、再度過ちを犯さないよう教え諭し、田直生を蘇らせた。蘇る前に亡き父は田直生に家の梁の上に隠した箱があり、それを開け、家を建て直すよう告げた。田直生が箱を探して見てみると、中には小判百両があり、それで失った田畑を買い、その後一族は繁栄した。

石川はこの物語のなかであの世の恐ろしい惨状と、田直生の親孝行の応報として生き返ったこと、その後豊かな暮らしをしたことを描き、因果応報を説いている。そして世の中の教化を行っている。さらに石川はこの作品末で地獄絵図について詳しく説明し、地獄絵図の歴史は長いとしている。中国古典の『子不語』、『聊齋誌異』などでは徳のある人間が死後、一定期間閻魔大王になっていることが記されているが、石川もこの作品を書くときに、それらの中国の作品を参考にした。

「累女」は、藩士與右と結婚した累女を描いた作品である。妻累女は腹を蛇に咬まれ、醜い容貌となってしまう、與右はそこで新たにお若と結婚し、お若と一緒に累女を川に落とし溺死させる。その後、累女はお若について恨みを晴らそうとし、毎日お若と與右を苦しめ、二人は安らぐことはなかった。僧祐天の力でお若についた累女を払ったものの、お若は病死してしまう。與右はいたく後悔し祐天に弟子入りし、祐海と名を改め仏門に入った。

この作品も因果応報の話であり、内容は江戸時代の幽霊話「累の淵」のお累の物語を改編したものである。心変わりした男の話は中国古典にも多く、例えば、宋の時代の陳世美の話がある。貧しい書生であった陳は妻と出会い、結婚し、その後妻の助けのもと成功するものの、その後、権貴女と結婚し、人を雇って前妻を殺させたが、最後はその報いを受ける。多くの話が大体同じ展開であり、中国も日本もひどい男が妻を捨て、殺すというもので、似ている。

「飛鼎」の因果応報の話も先の「累女」と似ている。山城の国（京都）の茶商宮本某は、老いて娘お清を授かる。大きくなって、甥の仁右を入り婿にし、結婚させた。だが、お清は天然痘の病にかかり、治癒するものの顔が醜くなった。仁右は醜くなったお清を嫌がり、ある女を金で買い妾とし子どもひとりも授かった。そこで仁右は謀ってお清を宇治川に落とし溺死させた。その後、子どもが天然痘にかかり、顔がお清そっくりとなった。お清は仁右の前に現れ苦しめ、ついに仁右は死んでしまう。その子も病に倒れ父のように叫ぶようになった。幸いにも村人が僧侶珂碩を紹介し、珂碩はお清の霊を鎮め、子どもの病気もよくなった。そこで仁右の子と伯父は珂碩に感謝し、お茶をたてるために大きな鼎を作り、この鼎を江戸の珂碩僧侶にお礼に贈りたいと思っていると、忽然として鼎が消えてしまった。そこで、伯父と甥と一緒に江戸に行って珂碩に会ってみると、なんとその鼎は彼の庵

にあった。それからこの鼎は「飛鼎」と呼ばれるようになった。

この話の前半は心卑しい夫が妻を殺しその報いを受けるもので、後半は大きな鼎が京都から江戸まで飛んでいくという不思議な出来事の物語である。石川はその篇の最後で「数十斤もある鼎が遠く飛ぶことができるだろうか。ある者は仏の叡智故にできた所行だという」と書く。さらに仏の智はいまだ分からず、その理を書くことはできない。ただ珂碩僧侶の伝記を持って記すのみだと記す。ここからは石川がこの話に疑いを持っていることを看取できる。

「阿岩」は次のような話である。民屋氏に婿養子に入った伊右は放蕩もので、ついに義父から追われるところとなる。そこで伊右は義父を恨み殺してしまう。家に戻った伊右はお岩と一緒に暮らすようになる。だが、後に西隣に住む伊藤某の娘お梅と通じるようになり、伊右は酒飲み友達の澤悦とお岩を殺してしまうと考えた。だが、澤悦はこのことをお岩に密かに話し、お岩は怒って刀でお梅を殺そうと考えた。だが、澤悦が止めようと刀を奪おうとして誤ってお岩を殺してしまう。終にお岩は幽霊となり敵を討とうとする。伊右は刀で霊を殺そうとして誤ってお梅を殺してしまい、そのまま逃げるものの、お岩の妹婿に殺されてしまう。

この話は『四谷怪談』を改編したもので、歌舞伎の話と内容が類似している。石川はこの話の最後に、「これは後々の舞台で取り上げられ広く後世に広まるものの、複雑であった話が省略され、ただの戯れの文となった」と記している。実際は、やや裕福な家の醜い娘が夫に騙されて捨てられ、祟る霊となって敵を討つという因果応報の話に過ぎない。

(2) 人間と幽霊の恋愛型

「奇縁」は、貧しい書生林某が、富裕な商人某と将棋が縁で知り合い、その娘の珠と駆け落ちの約束を交わすようになる話である。ところが商人がそれを知り、林との交際を禁じる。やがて林も居を他所へ

移す。ある日林は川べりで釣りをしている珠と再会を遂げるが、いざ珠を夜家へ連れて帰ろうとしたら、突然彼女は姿を消した。そして翌日人から珠がとっくに病死していたことを聞かされる。やがて林は在家の修行僧として各地を巡るようになる。ある時、盗賊の家に泊まり、あやうく災難に遭うところを盗賊の娘に救われる。この娘は盗賊の実の娘でなく、よそから盗んできた娘であった。娘は林を連れて故郷へ帰るが、そこで実は彼女の母親が珠の下女であったことがわかる。後にこの娘、玉が生まれたのだが、言葉遣い、外見、全てが珠に似ている。玉の生まれた日を尋ねると、何とそれはちょうど15年前林が川べりで珠に再会した日であった。奇縁である。後に林は玉と結ばれ子を作り、豊かな暮らしを送る。そして毎年珠の命日には経を上げ、珠の冥福を祈った。

『夜窗鬼談』中の怪異譚には、因果関係や教化を題材にしたものが多く、このような人間と幽霊が恋愛するロマンティックで幻想的な内容はあまり多くない。この作品は『聊齋誌異』の中の恋愛ものに決してひけをとっておらず、『聊齋誌異』の影を見ることができる。

「怨魂借体」は、新潟の長尾杏生という医術を家業とする男の話である。ある日、父の代わりに往診に行った先で青楼の妓女貞と出会う。二人は互いに惹かれ合うが、杏生の父に反対され、二人の仲を引き裂くために杏生は東京に医学を学びに行かされる。貞は杏生が故郷を離れたと聞き、左目を失明しやがて病死する。杏生は東京で開業し、妻を娶るのだが、四十になった時左耳が聞こえなくなる。どんな治療も効果がなかった。そして占い師により、杏生が昔女を裏切り、左耳が聞こえなくなった原因は嘆き死んだこの女の怨念によるものだとわかる。占い師は祭壇を設け女の霊を慰め、もし縁があればこの女に容貌の似た者を娶るよう、勧めた。こうして杏生は偶然通りがかった伊香保温泉の旅館で貞によく似た若い下女と出会う。女幽霊となった貞は

この女に自分の魂を託し、杏生がこの女を娶ることを望む。杏生もこの女を連れ帰ることを受け入れ、妾とし、男の子を一人生ませる。子のいなかった妻はこの子をかわいがり、後にこの世を去る時、貞以外の者を後妻としないよう夫に言い残した。

これは幻想的で複雑な人間と幽霊の恋愛物語である。想像の世界を広げさせるストーリー展開の他、主人公の男と女の奇妙で不思議な遭遇と出会いが生死の境を超え、冥婚にまで発展する様子を描いている。

「牡丹燈」の原典は中国明代の瞿佑による『剪燈新話』である。『剪燈新話』は後に日本に伝わり、江戸六年に浅井了意が『伽倻子』の中で、原作中の「牡丹燈記」を「牡丹燈籠」として書き換え、あらすじを原作により近づけて創作した。とはいえ、時代設定を室町幕府の天文年間とし、事件の発生は日本の盆、場所は京都で、主人公を五条通りに住む荻原新之丞とした。江戸時代後期、三遊亭円朝がこの物語を更に複雑に「怪談牡丹燈籠」と題し改編し、後に歌舞伎でも上演されるようになった。

石川があとがきにも書き記しているが、「牡丹燈」は円朝の「落語」をもとに肉付けした物語である。飯塚氏の下僕孝助の忠義心と隣人半蔵の邪悪な心、妻の横死といった怪異事件、荻原の死後の物語については省略されているが、この話は円朝の「牡丹燈籠」の縮小版と言える。

「牡丹燈」は、江戸時代の飯島某の娘阿露の物語である。阿露はか弱くよく病に倒れるため、柳島の別荘で養生をすることになった。そこに阿露の主治医志丈の紹介で、浪人荻原と出会い、二人は恋に落ちる。なかなか荻原に会えない辛さから、阿露は荻原を恋しがって遂には死んでしまった。荻原もまた阿露が怒った父親に斬られる夢を見る程であった。

ある日偶然、荻原は志丈からこのような話を聞いた。阿露は荻原を思慕し、そのことを父親に話すが、厳しい父親は二人の関係を許さな

かったため、阿露は食を絶ち死んでしまったという。その年の中元節、荻原が家の窓を開けるとそこに阿露が下女と一緒に提燈を持って現れ、自分の死のわけを話し部屋の中に入っていった。荻原に仕える伴蔵が部屋から笑い声が聞こえるので中を覗くと、女性の姿ははっきり見えないのに、楽しそうな様子が窺えた。その奇妙な様子を近所の老人に話すと、老人は名僧良石を訪ね、荻原の部屋に貼る幽霊除けのお札を授かる。しかし幽霊たちは伴蔵にお札を解くよう懇願する。幽霊におののく伴蔵はその願いをうっかり聞き入れてしまう。そしてお札を解くやいなや幽霊たちは部屋に入っていった。翌日、伴蔵と老人が荻原の部屋に入ると、そこにあったのは命を落とした荻原の変わり果てた姿だった。

(3) 表明教化型

「哭鬼」は石川の感情が吐露された作品で、自分を嘲笑するような文章が綴られている。石川は「哭鬼」で明治維新期の社会が西洋の知識を追求する時代に直面したため、自分はこの世の中で必要とされなくなると自嘲し、儒学の後継者がいない感慨にふけた。しかし全てをあきらめたわけではなく、後継する人物が現れることを願った。

「笑鬼」では、仙人と呼ばれる老人たちが数人、夜桜の花見酒に興じる様子を描かれている。そこには、老人たちの各地を旅したいという願望が叙述されている。突然そこに現れた笑鬼は人生など泡のようで、来年や数年先のことなどどうしてわかろうか、人は病を避けられず、それを予期することもできない、と老人たちを嘲笑する。仙人と呼ばれること自体可笑しいと言われても、老人たちは笑鬼に言い返す言葉が見つからなかった。

「瞰鬼」は、東京に住む富豪の物語である。彼は三階建ての洋館を建て贅沢に暮らしていたが、ある日新築祝いに招いた友人たちと盛大

に酒盛りをしている時、突然形なきある物が酒に酔った主人に息を吹きかけた。そのとたん、主人と客はけんかを始めてしまった。けんかは次第に派手になり、結局その場の全員が警察に拘留される。その後この家はだんだんと没落していき、豪宅も人の手に渡ってしまう。老僕がたまりかねて占い師の元へ行き、何とか主人の暮らしが元に戻らないかと尋ねる。しかしそこで初めて、宴会の日、主人があまりにその富をひけらかしたために、瞰鬼（家の中をうかがう鬼）が侵入してきて、没落させられたのだと知る。これを聞いて主人は占い師の勧告を聞き入れ、粗末な家に住み、節約に励み、名利を貪らず、正直に暮らしたことから、暮らし向きはまた前のようによくなった。物語の最後に石川は「そもそも徳には吉と凶とがある。吉の人は吉の徳を為し、凶の人は凶の徳を為す。鬼もまたその通りで、吉の鬼は吉の人を護り、凶の鬼は凶の人を助ける。凶が吉に勝つことはない。吉の鬼が護るところを凶の鬼が瞰うことはできない」と、自らの主観を記している。

作者は「瞰鬼」の話を通じて、世の中の人々に派手な暮らしをせず節約を心がけ、よい行ないをすることこそ正しい道である、という教訓を伝えている。

「鬼神論」（上・下）では、石川は鬼神のことは知るべきでないし、知る必要もなく、迷信を盲目的に信じてはいけないと述べ、「ああ、神と人との間にはなんと大きな隔たりが生じてしまったことか。強いて神のことを知ろうとすれば、思い惑うばかりである。朱子はこういつている。『鬼神ですら知ることができないことに思い惑わない。これこそ智者の取るべき道である』。先賢の説かぬところをどうして後世の愚昧が論ずることができようか。……鬼神の原理については知ることができないと認識することこそ、まことに知ることなのだ。君子は道を行なって、人の見ていないところでも恥じることがないという。どうして鬼神に媚びる必要があるろう。もし、あえて、その原理を知りたいというのなら、自ら鬼になるしかない。まだ、鬼になることもできず

に、いたずらに鬼について説くなどということは、分別なき惑いに他ならない」と、書いている。

「縊鬼」もまた、作者が幽霊の話を通して教化警告を世の中に発した作品である。下野蒲生君平が夜中に綾瀬川のほとりの草むらで用を足そうとした時、一本の木綿紐を拾う。川に投げ捨てようとしたその時、突然、髪がばらばらにほどけた女が紐を返せ、と言って現れた。この女は首をくくって自決した女幽霊で、生まれ変わるためにはどうしても紐が必要で、次の首吊り自決者を代わりにみつけないと見つけない。ちょうどしゅうとめに憎まれた嫁がいる。が、君平は女幽霊によいことをせよ、人の寿命は天が定めるもので、むやみに殺生してはいけない、さもないと冥土の役人の厳罰が下るぞ、と戒める。女は君平の建言に感謝する。やがて空が白み始めた時、君平は紐を切り刻み川の中へと投げ込んだ。

「縊鬼」の結末において、幽霊というものは本来形がなく、この世には存在しないものだとして強調している。そして、幽霊が見えるという人はきっと「見る幻は心や目の病気、つまり神経のせいだという人もある」と書いている。

石川はこの物語の中で、この世に幽霊などというものはもともと存在せず、幽霊が見える人は神経末梢が特別に発達し、過度に敏感なだけであると強調し述べている。

「靈魂再来」は、人はこの世で徳や陰徳を積むべきで、子孫にその果報がもたらされると述べた、教化警告が込められた作品である。内容は左内氏の孫が祖父の魂が戻ってくる夢を見るというもの。そしてあの世では差別待遇があること、全てがこの世での善悪行為をもとにしており、この世で善行を積んだものはあの世でよい報いを受ける。左内氏は冥府の状況を「しかし、貴賤貧富の区別というものはある。生前に学を修め、人を導き、恵み、善行を積んでいた者は豊かになっ

て立派な家に住み、まわりの者からも尊敬を受ける。じゃが、生前の行ないがずる賢く貪欲であった者は長者に使われて労役に苦しんでおる。生前に盗みを働いたり人を殺したりして世の中に害を及ぼした者は別の決められた場所において、いまなお闘争しておる。特に、生きている間に悪事を為し、それが露見しないままに死んでしまった者は、もっとも重い刑罰を受けている」と述べる。石川は結末の部分で、あの世でのさまざまな伝説や記載について、特に強調している。こういったことは、中国の古典小説の中にも時折見られる。「随園の『新齊諧』や『聊齋志異』、それに紀曉嵐の『雜誌』などに載っている幽明界の記事もだいたいはこの話と似たようなものである」。この記述からも、彼が中国の古典の怪異小説に相当詳しくあったことがわかる。

(4) その他

「千葉某」は悪い幽霊が人を脅かす話である。摂津の千葉某は普段人に怪談をするのが好きである。ある朦朧とした月夜、一人の美女が千葉某に怪談話をしてくれ、と訪ねてきた。ところがこの女は千葉の怪談がちっとも怖くないと文句を言い、自らが豊臣家が滅亡した時の怪談を始め、厲鬼に変身する。それを見た千葉某は驚きのあまり気を失ってしまう。そしてその後二度と怪談を口にする事はなくなった。中国に「夜道をよく歩くと、幽霊に出会いやすい」という俗語がある。千葉某は正にそれで、自分が怪談好きなあまり、本当の幽霊に会い肝をつぶしてしまった。この作品は、『夜窗鬼談』の中でもどこかユーモラスで面白い短編である。

「飛鶴庵」は幽霊払いをする物語で、奇行怪異な士、飛鶴庵がある計らいをして幽霊の一群をひょうたんの中に閉じ込め、海に投げ込む話である。

「阿菊」は、將軍の寵臣青山鉄仙が下女の阿菊を妾に欲するものの、阿菊に断られ、怒りのあまり阿菊を殺そうと思う。阿菊がお家珍藏の皿を十枚数えるよう仕向け、そのうちの一枚をわざと隠し、その罪で

阿菊を死に追い込む。阿菊は怨鬼と化し、青山の家は荒れ果ててしまう。雨風が吹くと必ず阿菊がこの荒れ家で皿を数える声を聞く者が出た。ある時、侠客と友人が家を探索すると、その日も阿菊が皿を数えたが、数えた皿の数は十三枚にまで達した。不思議に思った者がわけを尋ねたところ、明日は晴れるからここに来れない、だから明日の分まで今日数えるのだ、と阿菊は答えた。「千葉某」「飛鶴庵」「阿菊」の三篇は、厳格且つ実質的に道德思想を表明する『夜窗鬼談』において、ややユーモラスで怪奇的な作品と言えよう。

3、『聊齋誌異』の幽霊と冥界

魯迅は『中国小説史略』の中で「中国では本来巫を信じていた。秦漢以来、神仙の説は横行し、漢末には大いに巫がはやり、鬼道もそれに乗じて盛んになった。小乗仏教もまた中原に入り、伝播していった。鬼、神、道、霊、異といったものが盛んになり、晋から隋に至り特に鬼神の怪異を記すものが増えた」と書いている。この世を去った人間の怪談は魏晋の怪異小説の中に大量に記載されている。決して『聊齋誌異』に始まったわけではない。例えば『搜神記』の中の「河間女子」、『列異伝』の中の「談生」、『離魂記』の中の「倩娘」や、『太平広記』にも怪談が多く取り上げられている。また蒲松齡による幽冥譚は、魏晋以来の怪奇小説の様式を受け継いでおり、そこから更に複雑な内容の変化を遂げ、その創作の技法は怪異譚を一種の芸術の域にまで高めた。

本論文は『聊齋誌異』中の幽冥世界を論ずることが主要目的なので、魏晋及び宋時代の幽冥物語と『聊齋誌異』中の幽冥世界を比較することは、ここでは省く。

汪玢玲の調査によると、『聊齋誌異』中、怪談を取り上げたものとは

ても多く、合計170あまりあり、全体の三分の一を占める⁵⁾。

蒲松齡が描く幽冥譚について、筆者はそのイメージと内容から四つの類型に分けてみた。

1. 因果応報型（恩返し、善鬼等を含む）、
2. 人間と幽霊の恋愛型（幽霊同士の恋愛も含む）、
3. 表明教化型（冥界の統治の仕方等を含む）、
4. その他（悪鬼、奇癖等を含む）

（1）因果応報型（恩返し、善鬼等を含む）

『聊齋誌異』には、よい幽霊（善鬼）が人を助けたり恩返しをするというものがある。例えば「楮生」「葉生」等である。「楮生」は幽霊の魂が知己を助け、来世でよい報いを受ける話である。「葉生」は非常に才能があるのに試験の運に恵まれない葉生が試験に落ちて病死するが、後に恩人の丁公に恩返しをするため丁公の息子に勉強をさせる。やがて息子は進士に受かり、零落していた葉生はこの息子のおかげで挙人として葬儀を挙げられるまでになる⁶⁾。

この二作品は、『聊齋誌異』の主なテーマの一つである「科挙制度の弊害、試験の不平等さ」が、士子が鬱に陥り死んでしまうことを通して描かれている。

『聊齋誌異』には輪廻果報に関するものもある。例えば「三生」は、前世のことを覚えている劉孝廉の話である。この男は生前悪行を重ねたせいで、死後冥王から馬として鞭打ちなどの苦しみを受け、犬や蛇として生まれ変わった後、三世を経てやっと前世の罪を償いきり、四世目でやっと劉孝廉として生まれるに至った。作者はこの一人の人間

⁵⁾ 汪玢玢「《聊齋誌異》與鬼文化(續)」《蒲松齡研究》、《蒲松齡研究》編輯部出版、2003年9月第3期

⁶⁾ 本稿の『聊齋誌異』は、張友鶴輯校『聊齋誌異』上・下（上海古籍出版社、1987年9月）による

による三回の生まれ変わりを通じて、因果応報や善行の勧めを説いている。物語の中では、主人公の劉孝廉が閻魔大王に裁かれるシーンが事細かに描写されている。

前述した、善をなせばよい報いがあるという物語のタイプの外、『聊齋誌異』にはよい幽霊が神になる話がある。例えば「王六郎」は水鬼の王六郎が一時的な慈悲で、自分の身代わりになる死んだ人を逃してやったため、自分が転生できなくなり、最後は天帝からその善行を認められ土地神に任じられる話である。この物語には、水鬼王六郎と許という名の漁夫の真摯な友情と、恩返しという内容が織り込まれている。主人公の善良な性格を目立たせることで、読者を物語の中にぐいぐいと引き込む効果を出している。

この題材に相似したもので「水莽草」がある。湖南桃花江一帯に生息する毒草、水莽を人間が誤って食べると死んでしまうのだが、もし死鬼が身代わりをみつければその死鬼は転生できる。物語では主人公の祝生が友人を訪ねる道中で、既に死んでしまっただけで幽霊になった寇三娘が作った水莽茶を飲んでしまい、即座に死んで幽霊になってしまう。しかし彼は幽霊になってもきれいな心を失わず身代わりを探そうとしない。反対に、さまざまな手を打って誤ってこの草を食べてしまった他の者のために幽霊払いをし、天帝を感動させる。天帝は彼を天界の「四瀆牧龍君」に命じる。この物語には、男女の幽霊が夫婦になるエピソードなども盛り込まれている。しかしその題材と、『聊齋誌異』中のその他の婚姻や愛情を題材にしたものとは異なりを見せる。つまり、この作品では男女の愛情を描くのではなく、祝生の敬老や人に対するいたわりの心、正義を追求する高尚な人格などへの賛美が強調されているのである。

その他『聊齋誌異』における「呉生」や「王蘭」も、人が死後に神になった話であるが、ここでは紹介を省く。

(2) 人間と幽霊の恋愛型 (幽霊同士の恋愛も含む)

人間と幽霊の恋愛ものは、魏晋の怪奇小説の中にもある。例えば『搜神記』の中の「河間女子」や『列異伝』の中の「談生」、『法苑珠林』の中の「離魂記」等で、蒲松齡の描く幽婚物語は魏晋以来の怪奇小説の様式を引き継いでいるが、男女が自由な愛情を求める進歩的で発展的な様子が描かれており、物語をより豊かに演出し、男女が生死の境を乗り越え、愛を貫き、幽婚を遂げる。有名な作品としては「魯公女」「連瑣」「小謝」「聶小倩」「伍秋月」「連城」等がある。「魯公女」は不幸にも夭折した一人の狐の得意な女が、男主人公張生の愛慕と心からの焼香に感激したため、「幽霊」の姿で現れて張生と愛を交わし、その後生まれ変わって張生と夫婦になる話である。

「連城」は連城と喬生の愛が邪魔され、やがて死によって「幽霊」の姿である世で結ばれる、という話である。最後には二人とも元に戻り、生死を越えた恋を全うする。

「連瑣」は人と幽霊の恋愛話で、冥界を舞台にしながら、蒲松齡は夢を見ているという設定で、男の主人公楊于にあの世へ入らせ、英雄が美女を救うといったストーリー展開をし、最後は女主人公がこの世に戻り結ばれるという話である。

「魯公女」「連城」「連瑣」等ではどれも、恋人は皆愛の為に志を貫き、生死を超えて愛を全うするという世界が描かれている。

その他、幽霊同士の恋愛話も、『聊齋誌異』には幾篇もある。前述した「水莽草」は誤って水莽草を食べてしまった祝生と寇三娘という幽霊夫婦のめぐり合いの物語である。ただこの作品の主題は男女の愛情ではなく、あくまで祝生の善行の部分である。

「晚霞」は溺れ死んだ少女が龍宮にたどり着き、そこで龍舟で雑技をしている間に溺れ死んだ男阿端と宮廷舞隊に入れられ、そこから二人は恋に落ちる。さまざまな苦難を乗り越え、二人は幽霊となってか

ら夫婦となる。この話には、封建社会における青年男女が道德観や礼儀といった束縛から解放され、自由や幸福を獲得しても、結局最後には大きな代価を払わないといけない、という作者のメッセージが込められている。

以上のように、人間と幽霊の恋愛ものや、幽霊同士の恋愛ものは多くあるのだが、ここではこれ以上触れず、次に進みたい。

(3) 表明教化型 (冥界の統治の仕方等を含む)

『聊齋誌異』におけるこのタイプの物語は、大部分が冥府の世界で起きたできごとを描いている。

『聊齋誌異』には、地獄の情景をリアルに描いたものがとても多い。例えば「李伯言」はあの世での報いを事細かく描写している。「耿十八」「僧孽」等では冥府で行なわれる残酷な事が、力を込めて描かれている。他にも冥界の世界を描写した作品として「閻羅」「酆都」「李司鑑」等がある。

更に、冥府の上層統治者が民を痛めつける物語も大胆に描かれている。「席方平」「考弊司」等がそれで、民と閻魔大王悪鬼の闘いを描いているが、これは現実の社会の中で封建的統治者らが私腹を貪る様子を暗示し、作者のそれに対する不満や、清廉な政治を望む気持ちを表明している。

(4) その他 (悪鬼、奇癖等を含む)

悪い幽霊 (悪鬼) が人に悪さをする物語は、民間に多く流布しているが、『聊齋誌異』の早期の作品の中にもこのタイプの短篇ものがいくつかある。最も有名なものは「畫皮」で、これは美女に化けた幽霊が男を誘惑し、その腹を割り心臓を取り出す話である。後に道士が登場し、幽霊を本来の姿形に戻させる。現実生活の中で、人もまたさまざま

まな偽装や詐欺を働く。「畫皮」は幽霊が人に害を与える話だが、そこには社会教育の意味合いが含まれており、色にたぶらかされることのないように、という勧告がなされている。「屍變」は、一人の女の屍が夜中に人を襲う話で、鬼気迫り、この書の中で最も怖い一篇と言えよう。女屍は人殺ししか興味がなく、そのためには手段を選ばない、生きている人間に深い恨みを抱く殺し屋である。短篇ではあるが、作者が描く恐怖の場面は実に真に迫り、主人公の生に対する強烈な思いがシンプル且つ生き生きと描写されている。

その他幽霊が人を襲うものとして「噴水」「山魃」「咬鬼」等があるが、『聊齋誌異』の中に登場する悪い幽霊のイメージは、醜悪な人間の本質を映し出しているとも言える。

『聊齋誌異』の中にはよい幽霊、悪い幽霊の物語以外に、奇癖を持つ幽霊についてのものもある。

「棋鬼」がその一つである。これには、将棋好きが高じて破産してしまう幽霊が出てくる。将棋好きは父親を怒らせても改められず、やがて閻魔大王に寿命を縮められ、あの世まで連れてこられ、悪鬼獄で七年の刑に処される。しかし出獄してもなお将棋を打とうとし、閻魔大王に命じられた碑文を作ることをすっかり忘れる。とうとう冥府の監獄に戻され、人間に生まれ変わる機会を永遠に奪われてしまう。作品中の棋鬼はただの将棋好きでなく、将棋で賭け事をする博徒で、だからこそ破産にまで追い込まれる。物語からはユーモア感だけでなく、作者の風刺や嘲りも感じ取れる。

他にも奇癖のものとして「王大」がある。これは賭鬼が死後もあの世で負債してまで賭け事をする話である。「鬼令」は酒飲みが出てくる。自分が既に死んだことを知らず、幽霊の仲間たちと酒席でのどんちゃん騒ぎに興じる。生命の危険を顧みず狂ったように酒を浴びる様子の生々しい描写は、読む人の笑いを誘う。

ここまで、『聊齋誌異』のいくつかの型を見てきた。これら全て、表

面的には幽霊が登場するが、実は幽霊を通して人の世に警告を発するという作者の意図がある。人間と幽霊の恋愛ものは、男女の恋愛や婚姻の自由を追求し、冥府のしきたりものは、法や政治が公正であるべきだと提唱しており、社会や政府の暗い面を明るみにし、人心思想の教化という作用を具えている。その他の類型についても、仏教の因果や輪廻応報の思想が盛り込まれている。

4、『夜窗鬼談』と『聊齋誌異』にみる幽霊と冥界の比較

(1) 題材と創作方法

前述した『聊齋誌異』における幽冥物語の題材は、六朝志怪と唐代伝奇の系統を引き継ぐ他、里巷談話や民間伝説、友人から聞いた話や作者自らが経験したこと等に豊富な想像を加えて生まれている。創作の意図は「雅愛搜神、喜人説鬼（神を捜ることを愛好し、また、人に鬼を談らせて喜んだ）」の精神にあり、霊異世界の表象を通して作者の胸中にある憤懣を吐き出し、また理想の世界を映し出しもする。そして妖鬼たちを貶めることで、辛辣な嘲笑や風刺をし、現実社会を批判、また勸善懲悪を説き、社会教化にも一役買った。

創作方法に関しては、『聊齋誌異』の人間と幽霊の恋愛物語において登場する女性の幽霊の大多数は性格がはっきりしており、大胆に愛を追い求めるよう描かれている。また男主人公の方も非常に一途で、例えば「連瑣」「魯公女」は当時の封建社会の中では抜きん出たもので、進歩的と言わざるを得ない。また作者の結婚感や社会への理想もはっきりと表している。物語は確かに虚構であるが、そこには生活における浪漫主義を反映する創作方法が取り入れられている。

それから、物語の内容は非常にリアルに描かれている。例えば「畫皮」の悪鬼が人に化ける描写は「そっと窓からのぞいてみた。と、青

い顔をして、鋸のように鋭い歯をむき出した一匹の恐ろしい鬼が、人間の皮を寝台の上にひろげて、絵筆をとってこれに絵をかいていた。書き終わると筆を投げ出して、その皮を取りあげ、着物をふるような様子をして、すっぽりからだに着けた。すると、忽ち女になり変わった」と言う風に女幽霊が女性に変わる動作を詳しく書いている。その描写は細かで真に迫り、読者をその世界に引き込み、身の毛がよだつ感覚を与える⁷。

もう一点、プロット設定に関して『聊齋誌異』は、民間の宗教観念や智慧をうまく運用し、物語に幅を出している。怪談の中にある多くの幽霊の闘いの場面で、例えば「畫皮」では道士が鬼払いをし、「聶小倩」では剣客が剣法を使って退治する。「魯公女」では男主人公が魯公女の死後、何度も彼女の霊を拝み、経を読むことで魯公女の靈魂を感動させ、とうとう生まれ変わりこの男と結ばれる。もし輪廻といった宗教観がここに入れ込まれなかったら、この話は物足りないものになっていたであろう。

石川鴻斎の『夜窗鬼談』の序文には、『聊齋誌異』の影響を深く受けたことが述べられている。そして石川の『夜窗鬼談』における創作意図は蒲松齡と同様、「雅愛搜神」であり、序文でも引用している蒲松齡の「自誌」でもある。明らかに『聊齋誌異』を模倣の対象としているとはいえ、石川の創作目的は他にもある。それは『夜窗鬼談』中の怪談を通して作者個人の理想や抱負、それに当時の社会に対する不満を表明し、更に世間を貶め、教訓と警告を与え、勸善懲悪を説くという点である。この勸善懲悪に対する思い入れに関しては、蒲松齡と同様である。題材の採集は日本の民間伝説や友人の話、作者自身の体験に基づくが、これ以外にも『聊齋誌異』を模倣している点がある。

石川の『夜窗鬼談』における創作手法もまた、蒲松齡によく似てい

⁷本稿の『聊齋誌異』の日本語訳文は、増田渉訳『聊齋誌異』上・下（平凡社、1973年）による。

る。豊かな文学的想像力を駆使し、怪奇イメージを通して作者の社会に対する理想や風刺嘲笑を表現している。作品の結末にも『聊齋誌異』の「異史氏曰」（実は作者である蒲松齡の自己評価）を模倣し、「寵仙子曰」として自己評価が加えられているものがある。全体の創作叙事の風格において、『聊齋誌異』よりやや複雑さや屈折に欠け、またストーリーの展開においても『聊齋誌異』ほど変化に富まない。『夜窗鬼談』の作品の風格はあくまで平淡で素朴、厳肅で厚みがある。これこそが『夜窗鬼談』が表現する創作世界なのである。

（２）『夜窗鬼談』にみる『聊齋志異』の受容

既述してきたように『夜窗鬼談』の物語は題材の点で『聊齋志異』の影響を受けている。いくつか例を挙げると、たとえば、因果応報の「鬼兒」である。この物語は酒屋の夫婦が客甚平の財布のお金を盗んで、盗られた甚平が自殺し、夫婦の子供になって復讐するという話である。これは『聊齋志異』の「柳氏子」の構図を模倣しているものである。「柳氏子」は膠州人の柳西川なる者が仲間が苦勞してためたお金を自分のものにし、その仲間が柳西川の子どもに生まれ変わり、その財を使い果たすという話である。「鬼兒」も「柳氏子」も悪い行いには悪い報いがあることを主題としており、ただ、その表現に違いがあるだけである。石川が平板な形で飽きさせることなく書き、最後に教えを書くことで終わるのに対して、原作である蒲松齡は細部にわたって書き、対話も用いて復讐する理由を示し、生き生きと登場人物を描いている。

「縊鬼」にでる首をくくって自殺した女性の幽霊は身代わりを捜し転生しようとするが、その幽霊に主人公蒲生君は善行を勧め、「その人生を全うし、命を救いなさい」と述べ、この先転生する機会を待てと教え諭す。この話は、既述の『聊齋誌異』の「王六郎」や「水莽草」

の話と展開が非常に似ている。ただ、蒲松齡の書く「王六郎」と「水莽草」は因果応報と民間に伝わっている話という観点から書かれているのに対し、石川の「縊鬼」は勸善懲惡の教化が出発点であり、民間で知られている自殺した霊が身代わりを捜し、転生するという話を記すものとなっている。さらに末尾で「幽霊というものは本来形がなく、その言葉をどうやって聞くことができようか」と強調する。幽霊が見えるという人はきっと「見る幻は心や目の病気、つまり神経のせいだ」と書き、霊異に対して疑いを持っていることが明確に示される。

「客舎見鬼」は石川と友人渡辺がある夜に宿で若い女性と会うが、後にそれが宿主から厳しく責められて舌をかんでしんだ遊女だったという話である。毎晩、恐ろしい形相で出てくるところは、『聊齋誌異』の「縊鬼」の話のなかにある。范生が店の宿の嫁が首つり自殺をすることをみるが、そのようなストーリー展開である。

「冥府」は閻魔様とあの世の話である。石川は文末に「地獄変相図」で各種の地獄の恐ろしい情景を書いているが、それは『聊齋誌異』の「李伯言」、「僧孽」、「閻羅」、「耿十八」などで描かれる冥府の情景であり、「冥府」は『聊齋誌異』の影響を受けていると容易に判断できる。また、「冥府」の文末に『子不語』や『聊齋誌異』などによれば。有徳の人が死後閻羅となった場合、勤務には自ずと期限がある」と書いている。

『夜窗鬼談』の「靈魂再来」の文末には、冥界について中国には古来があると説明している。「随園の『新齋諧』や『聊齋誌異』、それに紀曉嵐の『雜誌』等に載っている幽明界の記事も、だいたいはこの話と似たようなものである」というものである。また、「靈魂再来」では「生前に善行を積んでいた者は豊かになって……じゃが生前の行いがずる賢く貪欲であった者は、長者に使われて、労役に苦しんでおる」と書かれ、様々なあの世の様子と因果応報の関係が描かれている。こ

れらも『聊齋誌異』の「庫將軍」、「死僧」、「陳錫九」などに似た描写がある。したがって、「靈魂再来」も『聊齋誌異』の影響を受けているということは疑いようがない事実である。

(3) 文学思想に関して

既述したように石川鴻齋の手による幽霊、冥界の話は蒲松齡の『聊齋誌異』の影響を受けており、いくつかのすじは『聊齋誌異』の模倣である。だが、文学思想に関しては蒲松齡とは異なっている。蒲松齡は清朝時代自らがいた環境のなかで輪廻転生や人々の間に広がっていた因果応報の観念などを通じて創作し、勸善懲悪を目的としていた。ただ、蒲松齡は存命の間に名をあげることはできず、悲憤の思いが表にでることはなかった。幽霊や冥界の怪異譚を借りて彼の考えを表して、人間性を風刺し、社会に対する種々の不満を書いた。

他方、石川鴻齋は明治末期の儒者であり、当時は科学技術が新たな学問としてその立場を築いた時であった。石川は新たな学問についても知識を得ており、それ故に『夜窗鬼談』には理性なるものが比較的存在し、無神論に傾く点があった。前述した「縊鬼」は幽霊を疑うことを説き、「神経のせいだ」と幽霊を見る理由を解釈する。

「鬼神論」上・下篇のなかでは、石川は鬼神のことは知るべきでないし、知る必要もなく、迷信を盲目的に信じてはいけないと述べる。石川は物語の中の怪異譚を借りて、迷信を打破し、道徳や教訓を伝えようとしたのである。ここにも儒学者としての道徳思想で人々を啓蒙しようという使命感を見ることができる。

5. おわりに

最後に本稿をまとめておこう。『夜窗鬼談』の幽霊や冥界の話は、題

材、プロット、創作意図、背景など『聊齋誌異』の影響を色々と受けているが、だが、その作品の雰囲気は異なる。『夜窗鬼談』の場合、物語を叙述するものの、幻想的なストーリー展開には重きを置いておらず、魑魅魍魎とした感じを出す意図もない。その物語の展開を通じて、または幽霊の話を通じて、世間の人々に人間として正しい道を示すものとなっている。

創作意図の点で言えば、幽霊や冥界に対する姿勢にも違いがある。『聊齋誌異』も『夜窗鬼談』も勸善懲惡を基本的な考えとしているものの、石川は鬼神などの存在を信じておらず、その点は「鬼神論」や「哭鬼」などの作品からも伺える。儒教思想を用いて、鬼神について道徳的に捉え、合理的に理解し、最後は現実について考え、人間が追求すべき道を説く。それは修身を重ね愧じない生き方をすることであり、鬼神の理を強いて説く必要はなく、鬼神に媚びる必要はないというものである。それ故に『夜窗鬼談』の論じられている幽霊や冥界の話には道徳意識が出ており、その理性に基づいた表現は『聊齋誌異』よりも、とても強いものである。

参考文献

- 小倉齊、高柴慎治譯註（2003）『夜窗鬼談』。春風社
- 王三慶（2003）『日本漢文小説叢刊』第一輯第二冊。台灣學生書局
- 汪玢玢（2003）「『聊齋誌異』與鬼文化（續）」『蒲松齡研究』第三期『蒲松齡研究』編輯部
- 張友鶴（1987）『聊齋誌異』上、下。上海古籍出版社
- 黑島千代（1995）『小説戲曲研究5』。「石川鴻齋的『夜窗鬼談』與蒲松齡的『聊齋誌異』」清華大學人文社會學院中文系。聯經出版社
- 增田涉訳（1973）『聊齋誌異』上、下。平凡社